

アイス・エイジ  
氷の絶対女王政

永塚  
紗季



1

「ん…」

二人だけの練習を終えた体育館。  
がんばり屋の紗季には珍しく、  
深い吐息をついてペタンと  
体育座りをする。

「今日はちょっとハードだったかな？」

2

「このくらい入っちゃら…  
と言いたいとるんですけど、  
さすがに疲れちゃいましたね。」

そう言うてはにかんだ頬を、  
玉の汗が伝う。

3

「ん、じゃあボールはオレが  
片付けるからそのまま休んで。」



1  
「えと、じゃあお願いします。」  
心得たとばかりに足元の  
ボールを拾い上げ――

2  
「…Cui」  
そのまま顔を上げると、  
体育座りの脚の間から  
スパッツに包まれた下半身が  
モロに視界に飛び込んできた。

3  
「…長谷川さん…?」  
…いかん、両腿を抱え込んだ  
腕の下の、ぷつくりとした  
恥丘から目が離せない…

1

「あ……☆」

オレがどこを見ていたか  
気付かれてしまったようだ。  
顔を赤くして股間を  
覆い隠す紗季。

2

「こ……ごめん！  
そんなつもりじゃあ……」

あわてて弁明したところまで  
女の子の大事な部分を  
凝視していた事実は変わらない。

1  
「……………」  
怒るといふよりは  
困ったような表情で、  
紗季が上目遣いに  
オレを見つめる。

2  
「長谷川さんも…そういっ  
お年頃なんですすよね…」  
「うん？」  
「あうあ…いいやまあ…★」  
バツの悪さも手伝って、  
否定も肯定もできずに黙りこもった。

3  
「…トモのこともいつもあんな目で  
見てるのかしら……………いいなあ…」  
「………」  
ももごと何かを呟いたよう  
だったが、うまく聞き取れなかった。

1

「——長谷川さんに見られるのは……  
イヤじゃない……ですけど」

耳を疑うような言葉に  
顔を上げると、おずおずと  
左手を元の組位置に戻す  
紗季の姿があった。

2

「……トキには悪いけど、私だてで少しくらい——」

さつきから小さな呟きの中に  
智花の名前が出てくるのは  
気のせいだろうか。  
いやツツコンではいけない  
というのには理解しているが。



1

少なくとも罪悪感を  
伴いながら、再び  
目に入るところとなつた  
紗季の恥丘を見つめる。

2

[.....]  
[.....]

3

「——触ってみても……いい？」  
紗季の赤らんだ頬と、  
アイガード越しの潤んだ瞳が  
いつそこの興奮を誘つた。

1

「……!?  
…は…は…  
…と…と…」

戸惑いを見せつつも、  
ほとんど間を置くことなく  
承諾してくれた。

2

「…あ…」

壊れ物を扱うように、  
ゆつくりと布越しの  
恥丘に指を伸ばす。

触れた瞬間、いっそう  
頬を赤らめた紗季が、  
切なげな吐息を  
漏らした。



1

「…っん…あ…ひっ…っん…」

さするように指を  
優しく撫で動かす。  
そのたびに甘やかな喘ぎが  
紗季の口から漏れた。

2

「…紗季って

感度良いんだね…  
ひよとして普段から  
触つてたり、する？」

艶かしい声に  
煽られるように、  
耳元で少しイジワルな  
問いをかけてみる。

1

「わ…私だって年頃  
なんですから…っ★  
こっついことには  
興味はありますっ…!」  
…しまった、肯定  
されてしまった。

2

しかし怒った風ではなく、  
ただ困り顔で身を預けた  
ままにしてくれた紗季が  
とても愛おしい。

1

「あ…っん……  
はっ…長谷川さんっ…  
ちよっと…激しい…  
かもです…っ」

「…んん…  
…いっいっいっいっい」



1

無意識のうちに強くなつていった愛撫に気付いて手を止める。

「や……ん、いやではない……ので……その、や、やめないでください……♡」

2

言ってしまったから、自分が何を口走ったのか、思い至つたらしく、羞恥に顔を赤らめる紗季。

3

「……ん、わかったちゃんと、優しくする。」  
耳元でそうささやき、愛撫を再開した。

1

…ただ、紗季が  
快感を覚えてるのは  
一目瞭然なので、  
もう少し踏み込んで  
みることにする。

2

「ふあ…っ!?!  
…んっ…ひゃ…  
はふう…♡」  
強くなりすぎ  
ないように  
気をつけながら、  
紗季の入り口の  
辺りに指を  
押し込んだ。

1

すっかり火照った顔の  
紗季に寄り添って、  
優しく、時に強めに  
愛撫を続ける。

「ん……くっ……んん……  
んあ……んっ……んっっ……♡」



1

快感に耐えるように  
きゅつと瞳を閉じ、  
喘ぎを押し殺すように  
唇をかみしめる紗季。

「…紗季??」

「…もつと声を出しても  
いいんだよ?」

2

「…でも…そんな  
はしたない…」

指に伝わるのは  
すっかり湿り気を帯びた  
スパッツの感触。  
身体はこんなに正直  
なのになあ。

1

紗季の可愛い声が  
もともと聞きたいので、  
少し強引に行動を起こす。

「は…長谷川さん!?  
…な、なにを—」





1

脚の間に頭を潜らせ、濡れそぼった紗季のアソコに舌を這わせてみた。

2

「ふぁ……っは……  
あぁん……っ！」

予想以上に  
大きい喘ぎが  
紗季の口から  
ほとばしった。  
ちよま……！  
さすがに  
やりすぎたか？



1

紗季も慌てて口を噤む。  
ちよつと恨めしそうに  
こちらを見るが、  
この際無視して愛撫を  
続けた。

2

「あ…っ…ひうん…っ♡  
…こ…こんなの  
ヘンタイっぽいですよ  
長谷川さん…っ★」

1

こちらの意図を汲んで、  
喘ぎを抑えるようなことは  
しなかったが、  
俺はすっかりヘンタイ呼ばわりだ。  
…あながち間違いではないが。

2

「んあ…はあ…っ  
長谷川さん…っ  
はせがわさあん…っ」

3

高まる喘ぎに「こちらも  
舌の動きを早める。  
ちゅくちゅくと高めに  
水音を立てるのは  
もちろん——わざとだ。  
「あ…っ♡  
もおわたし…だめ…  
らめえ…っ！  
イツちやいそおれす…っ♡」  
やはり「イク」という感覚を  
既に知ってるんだな、と  
ヘンに納得しながら、  
さらに紗季を攻め立てた。

1

紗季の入り口を優しく、  
それでも今までで一番強く  
刺激した瞬間——



1

「んあ…っ♡  
ふ…あああんっっ!!」

ひとときわ高い嬌声を上げて、  
紗季が身体をわななかせ—  
くたつと膝に頭を預けた。

2

「…っは…っ…  
うあ…っ…はっ♡」

きゅつと瞳を閉じて  
荒い吐息を繰り返す。  
…今の声が  
体育館の外まで届いて  
ないことを願おう。



1

多少は動悸が  
落ち着いたのか、  
顔を上げ、上目遣いで  
オレを見る。

「は…長谷川さんに  
舐めてもらっちゃった…  
と…トモは…」  
「…」

2

ぼそぼそと呟く声は  
ほとんど聞き取れないが、  
やはり智花の名前が  
出てきた気がしてイヤイヤ  
これ以上は考えるまい。

「…だいじょうぶかい紗季？」

1

「ふふふ……  
だいじょうぶも何も……  
私いま、すごく幸せ  
なんですよ？」  
言葉どおり、  
限りなくご満悦な表情で  
首をかしげてみせる紗季。  
うわなんだこれ  
部屋に飾りたいw

2

「まてと——  
それじゃあ場所を  
替えましようか。  
今度は私が、  
長谷川さんを  
幸せにする番です♡」

3

そう言うと、  
心なしか艶やかさの  
交じった微笑を  
浮かべる彼女の姿は、  
まさしく——  
「アイスエイジ」  
「氷の絶対女王政」  
の二つ名に相応しく  
見えたのだった。

1

薄暗い体育倉庫——  
どちらからともなく服を脱いで、  
一糸纏わぬ姿となる。

2

「はっ……  
いまさらですけど、  
少し恥かしいです★」  
そう言つてはにかむ  
裸身の紗季が、  
実際の年齢よりも  
大人びて見えた。

3

「あれ……長谷川さんの……  
その——おちんちん、  
ちっちゃいですね？」  
ぐは……っ!?  
「小さい」と言われて、  
少なからずショックを  
受けた——



1

「さっきまで  
大きくなつてたと  
思ってたんですが…」

2

…なんのことはない、  
多少落ち着いて  
勃起が収まり気味な  
だけのことだった。  
「あ…と、  
だいじょうだよ  
こんなのはすぐに—」

なにがだいじよぶ  
なのかわからないが、  
上から見下ろすカタチで  
紗季のささやかなふくらみ  
を見ていると――



1

「ふわ……っ？」

みるみるうちに血流が集まって、立派に(?)そそり立つ我が息子の雄姿があった。

2

「紗季のそんな姿見せられて「こつならないヤツなんて男じゃない。」

得意げに胸を張るバカ一名。

3

「は……長谷川さんたらもう……トモにもそんな風に言ってるんじゃないんですか……？」

照れ隠しなのか、そっぽを向いてまたももごもごと呟く。  
……やはり智花の名が出てきてる様だが、いいや、もう気にしないことに決めた。

1

「じゃ…じゃあ、触ります…ね？」  
そう言っつて、おつかなひつくりの体で  
右手をペニスに添える。

2

「…ん」  
「ひゃ…!?  
う、動いた…」  
当然ながら触るのは  
初めてなのだろう、  
こわごとと、  
あるいは興味深そうに  
手を動かす紗季。

1

「ん……ん……ん」  
右手を根元あたり、  
左手で力を包み込んで、  
一生懸命さすってくれる。

「わ……ぬるぬる……」

2

年相応な口調で、興味深々に  
先走りを指に絡ませ、  
さらに刺激を加えてきた。

3

「うあ……は……う  
……あ……う」

「……ふふ……男の人も  
ちゃんとえっちな声  
出すんですね」と

1

そういう紗季のほうも、  
気が昂つているのか、  
深い吐息を繰り返している。  
…それがまたペニスに  
当たつてなんともはやー

「う…うん、紗季の手が…  
ひんやりしててすごく  
気持ちいいから…う」

2

それを聞くと、心なし嬉しそうに  
やさしくやさしく手で愛撫をしてくれる。

「…はあ…はあ」

3

—そこであらためて目に  
入ったのは、やや未発達  
の小振りなおっぱい。

1

「……あ……長谷川……さん……？」  
少し驚いた声を出したものの、  
桃色の乳首に添えられた  
オレの指を見て――

2

「……」  
期待するような眼差しで  
オレを見上げる紗季の姿があった。  
――当然息子はガツチガチw

1

紗季の手の動きに  
呼応するように、  
ピンクの頂きを  
優しく愛撫する。

「あ……ん……っあ……  
ふあ……くうん……っ♡」

2

女の子のほうが感じやすい  
と思うのは偏見だろうが、  
オレの声は紗季の喘ぎにすっかり  
打ち消されてしまっていた。





1

「や…んっ♡  
は…長谷川さん…っ  
そんなえっちな触り方  
しないでください…っ  
ああ…ん…♡」

「いやいや、紗季だつて  
オレのチンポ握り締めて、  
すっごいエロいしこき方  
してるじゃないかよ」

2

露骨な言葉で指摘されて、  
恥かしげに口を嚙む紗季。  
それでも手を休めないで  
くれるのが心底愛おしい。

3

「や…きっ…オレ…  
もっろもっろ」

ざわざわとこみ上げてくる  
射精感を覚えながら  
そう言葉を漏らした。

1

「え……あ、はいっ……♡  
 じゃあもう少し激しく……」  
 オレの言葉を汲んで、  
 絶頂に誘うべく  
 手の動きが早まる。  
 ……勉強熱心なのは良いが、  
 そういう方面で発揮  
 されると複雑ではある。

2

「ふわ……ひゃんっ!?  
 はせ……がわさん……っ  
 ……そんな摘んじゃや……ですっ……♡」  
 強くなりすぎないように  
 気をつけながら、紗季の乳首を  
 摘み、捻り、引っ張るように刺激する。

3

「ああん……っすこい……っ♡  
 自分でするよりすこく  
 気持ちいい……っ！」  
 ……本音がだだ漏れですよ……  
 ちくしよっすっげえ可愛いw

1

「く……うああ……  
紗……季……」

「は……あ……っ……  
ひゃん……」

2

駆け巡る快感に  
身をまかせ、  
白濁した欲望を  
解き放った。

1

「は…っ…はあ…っ」

未だ止まらない欲望が、  
紗季の顔を、身体を  
容赦なく汚していった。

2

「す…っ…っ…っ…っ…っ  
出ましたね…♡」

アイガードのグラス  
越しにこちらを伺う  
表情は、心なしか  
得意げに見える。

1

「……ごめんな、  
アイガード  
汚しちゃつて……」

「……平気ですよ  
洗えばちゃんと  
落ちますし、  
それに——」

2

そう言うと、口元を伝う  
精液をペロリと舌で舐めとって——

3

「汚いとも思いませんし……ね♡」

心の広い女王さまは、  
さながら女神のように  
柔らかく微笑むのだった。



1

運動用のマットを  
ベッド代わりにして、  
四つん這いの紗季の腰を  
そっと抱き寄せる。

2

「じゃあ紗季…  
いいい…かな？」  
緊張を抑えながら  
問いかけると、  
キョトンとした  
顔でこちらを伺う  
紗季がいた。

3

「ここまで来て  
イヤがるわけない  
じゃないですか…。  
—ふふふ、  
長谷川さん、けっこう  
そぞつかしいですね。」  
くすりと微笑む紗季。  
うらむ、年上なのに  
良いように扱われてる  
気がする★



2

「…ちゃん……  
そんなに撫で  
まわさないで……  
ん……★」

1

「あ……ちよと……  
長谷川さん？」  
照れ隠しに  
目の前にあつた  
お尻を撫でてみた。  
……おお？  
これは思いのほか  
触り心地が良い。



1  
「つっむ、  
これほどとは…。  
腰周りの筋肉は  
引き締まっているのに、  
すべすべもっちりとした  
このお尻の感触——」

2  
「冷静に批評しないで  
くださいっ！」  
怒られてしまった…が、  
それで引き下がる  
わけも無くw





2

紗季が引きつった  
声をあげる。  
それもそのはず、  
柔らかなお尻の  
肉を寄せて、  
いきり立ったペニスを  
擦り付けたのだ。

1

「どれどれ…ちやうと  
失礼して—」  
「んんん…」



1  
「うおお…  
すごい感触…っ  
ぐっじょ  
紗季のお尻！」  
このまま  
尻ズリで果てても  
本望だと思った。

2  
「そんな寝め方  
されても嬉しく  
ありません…っ！」  
…あ、まずい、  
紗季がシト目で  
こっちを見る。



1

「はは…ごめんごめん  
すっかり我を  
忘れちゃって—」  
紗季のお尻は  
先走りですっかり  
ベトベトになっていた。

2

「……長谷川さんの  
ヘンタイ…」  
まったくもって  
返す言葉も無く…★

1  
気を取り直し、  
硬く張ったペニスを  
紗季の入りに口に  
宛がう。

2  
「……じゃあ  
挿入れるよ？  
…痛かったら  
言ってね？」  
「はい……っ  
大丈夫……です。」







1

「……」

少し待ち、  
紗季が軽く息をついた  
タイミングで――



1

うん...うん...

2

少し強引に、  
腰を押し進めた。



1  
「いあ…つあ…  
んああ…！」

2  
苦しげな紗季の  
喘ぎが響く…が、  
紗季から何も  
言つてこない以上は  
このまま続ける  
べきだろう。





1  
「んっっっっ  
うあ……んっっ」

2

挿入の際はともかく  
今はただ、紗季に  
負担をかけない  
ことだけを念頭に  
少しずつ、少しずつ  
膣奥へと向かう。



1

「…」

2

やがて—ペニスの先が壁に当たるとの感触を覚え、この上なく紗季の膣内を満たす状態となった。

1 「ああ…すい…♡  
私のお腹——長谷川さんで  
いっぱいになってる…♡」

2 「紗季…平気？  
苦しくないかな？」  
「はい…だいじょうぶですわ  
…苦しいどころか  
幸せいっぱいでます♡」

3 そう言つて微笑む  
紗季の表情が  
本当に嬉しそうに  
見えたので、  
オレ自身も幸せな  
感情で満たされる  
のだった。

1  
「…長谷川さん…  
動いてくださって  
いいですよ…?」

2  
「うん…じゃあ動くね?  
痛かったらガマンせずに  
言っただよ?」  
また痛みもある  
だろうに、健気に  
そう言う紗季の  
気持ちを中心に  
愛しく思う。





1  
「……ん……い……あ……  
く……ん……っ★」  
……言っただとで……  
ガマンするのが  
紗季の気質だと  
理解しているので、  
できる限り優しく  
腰を動かさず。

2  
「……ん……さし……ん……  
……気持ち……いい……ですが、  
長谷川……さん……っ」  
「……うん、紗季のマン」は  
キツキツだから、  
すっごく気持ちいいです★」

3  
「や……っ？  
やだも……っ★  
長谷川……さん……たら……」  
露骨な言葉に反応して  
押し黙る紗季。  
——い……かん……ご……ち……の  
ガマンが先に限界を  
迎えそ……うだ★



1

「ふわ…あ…  
はっ…っん…っ♡」  
なんとか理性を保ち、  
緩やかな抽送を  
続けていると、  
紗季の声に甘い響きが  
交じりはじめた。

2

「や…っああん♡  
こ…声…  
出ちやう…っ♡」

3

…紗季も感じ始めてる  
のが明らかになつたので  
腰の律動を強めてみる。  
「ふあっ…っ♡  
ひあ…あ…は…  
長谷川さん…っ?」

「ごめん紗季…っ！  
さつきは  
ああ言っただけど…っ  
ガマンしてくれると…  
嬉しい…っ！」

「あ…っ謝らなくても  
…いい…ですけど…っ  
あ…ふああんっ♡  
ちよ…はげし…っ！」



欲望は加速して、  
食るよつに腰を動かす。  
紗季の喘ぎが艶やかな  
まま、たつたのが救いだつた。





1  
「ふわは……っあぁあ……っ！  
すこい……っ長谷川さん……っ♡」  
紗季の蜜壺を掻き回す  
卑猥な音が響く。  
サラサラの髪が右に左に  
激しく揺れた。

2  
「ん……き……っ……  
オレ……っ……  
限界だよ……っ！」

3  
「は……いい♡  
長谷川さん……っ  
お願い……っ！  
一緒に……  
いっしょにイッて  
ください……っ♡」





1  
「んあ…は…♡  
ああああん…っ!!」



1

紗季の甲高い  
喘ぎを聞きながら、  
繋がったまま  
白濁した欲望を  
解き放つ――



1

「ふあ…は…は…  
んっ…はあ…っ♡」  
二人して絶頂の  
余韻に浸りながら  
荒い吐息を繰り返す。

2

「あ…はあ♡  
お腹のなが—  
すっこいあつたかい…♡」  
未だに繋がった  
ままのそこからは、  
収まりきらない精液が  
あふれ出していた。

1

「その…ごめん…  
なかに出しちゃつて…。  
もうちやうと考える  
べきだった。」

「…だから  
謝らないでください。  
—まだ大丈夫  
ですから♡」

2

…それはつまり…まだ  
そういう大人の準備は  
出来てないということ…  
だろうか？  
それならばひと安心—  
…ていやいや！  
そういう感情は女の子に  
失礼だ！

3

「—それに…  
そうならたら  
ちゃんどセキーン、  
取ってくださいよね〜」

そう言いつつ優しげに  
微笑む紗季だった—  
が、その中に有無を  
言わせぬ何か  
秘められているのが  
感じられた。  
…うむ、女王陛下には  
絶対服従、なのである★